

Title	Studies in the Middle English Didactic Tail-rhyme Romances
Author(s)	田尻, 雅士
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42802
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	田尻 雅士
博士の専攻分野の名称	博士（言語文化学）
学位記番号	第 16388 号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	Studies in the Middle English Didactic Tail-rhyme Romances (中英語教化的尾韻ロマンスの研究)
論文審査委員	(主査) 教授 今井 光規 (副査) 教授 高岡 幸一 教授 渡部真一郎

論文内容の要旨

序説と概観－尾韻ロマンスはいかに研究されてきたか

尾韻ロマンスは中世末期に英国東中部地方で隆盛したもので、本論文で扱う作品は主として6編のユースタス・コンスタンス・フロレンス・グリゼルダ（以下 ECFG）伝説と4編のブルターニュ短詩（以下、短詩）である。『エマレ』は両者に属する。）まず尾韻ロマンスを扱った諸研究を紹介した。初期の重要な研究として Trounce のものがある。彼は、尾韻ロマンスをフランス派、西中部派と並ぶ重要な物語詩群と位置づけたが、これには反対意見も多い。他の二派に見られるような名作がないからである。筆者は Trounce には基本的に与しないが、尾韻ロマンスのうち一部（本論文で扱う作品）は一定の共通性が見られる作品群であると考え。さらに尾韻ロマンスの当時の流行に鑑み、中世英国文化の一樣相として研究する必要性を強調した。方法論的には、作品をとりまく写本コンテキスト、類話、文化・社会的コンテキストを考慮することが大切である。

第1章 「日は昇り燦然と」－尾韻ロマンスにおける「浜辺に立つ英雄」主題

まず口誦定型理論の概略と、その枠組内で発見された「浜辺に立つ英雄」主題を紹介した。この主題は「旅の終わりが始まりに、英雄が従者を共に浜辺に立つ。そこに光が射す」というものである。後に浜辺は境界一般と再解釈され、適用範囲が広がった。本主題は古英詩に多いとされるが、人類普遍の境界性の表象とも考えられる。次に6編の ECFG 伝説に見られる本主題を考察したが、それらは実際の浜辺を舞台にするなど、原型に近いものである。これらの類話も検討したが、この主題は殆ど見られない。さらに本主題が現れるのは、主人公の流離の始まりなど物語の重要な転機である場合が多い。これらの作品に題材の貸借関係がある状況からして、作者はこの主題を共有していた可能性がある。

第2章 中英語「ブルターニュ短詩」

中英語の短詩には二種類ある。二行連句で書かれた5編と、尾韻形式で書かれた4編であり、作風も違う。試みに妖精および合戦場面の有無、作品の舞台の観点から両群を比較した。前者が妖精を登場させたり、ブルターニュを舞台にするなど本当の短詩と言えるのに対し、後者は短詩とは名ばかりで、合戦場面が多く、ケルト圏以外の欧州大陸が舞台になっているなど尾韻ロマンス一般に見られる特徴を有している。さらに尾韻短詩には受難の主人公の復権と因果応報の主題が存在する。『ローンファル卿』では主人公を苦しめた王妃が彼の愛人の妖精姫の吐息で失明する。

『エマレ』ではエマレを讒訴した義母が息子により追放される。『トゥールーズ伯』では、家臣に迫害される皇后が伯に救われ、家臣は処刑される。『ゴウサー卿』は主人公が迫害者となる。悪魔の子ゴウサーは人々を迫害するが、後に教皇の命で過酷な贖罪を果たす。一方、二行連句短詩では迫害が無いが、あっても迫害者は処罰されない。また尾韻短詩に登場する女性達は、作品展開への寄与という観点から、重要な役割を果たしている。『ローンファル』の妖精姫は主人公を庇護し、『エマレ』のヒロインは家族の再会を画策し、『トゥールーズ』の妃は夫と伯の和睦を進言し、結局その通りになる。『ゴウサー』に登場する皇帝の娘は、道化を演じるゴウサーの正体を見抜き、援助を与える。一方、二行連句短詩の女性達は積極的に物語展開に貢献することがない。尾韻短詩の女性の活躍ぶりは当時の聖母崇敬を無視して考えることができない。聖母崇敬とロマンスの関係は次章以降でも論じる。

第3章 マリアの子供達：フロレンス『ローマの善女フロレンス』をめぐる

標題作は ECFG 伝説の一つである。「受難の皇后」伝説には各種の類型があり、ゲスタ・ロマノールム型、フロレンス型、聖母奇蹟譚型等が知られる。フロレンス型はゲスタ型に近いとされる。同伝説は視覚芸術でも扱われている。一つはイトン校礼拝堂の壁画であり、今一つはノリッジ大聖堂内ポーチン礼拝堂のポス（天井浮出し飾り）である。ともに聖母奇蹟譚型と考えられる。標題作と壁画やポスとの直接の関連は実証できないが、当時の聖母崇敬を鑑みると、実は共通した心象風景が投影されていると考えられる。そこで本ロマンスと、「受難の皇后」を扱った各種『ゲスタ・ロマノールム』、中英語版「聖母奇蹟譚」、クリスチヌ・ド・ピザンによる類話、さらに壁画とポスとを比較した。本作品はフロレンス型、『ゲスタ』はゲスタ型、その他は全て聖母奇蹟譚型である。結果的に、確かに『フロレンス』と『ゲスタ』は共通点が多いことが判った。しかし『ゲスタ』では聖母は関与しない。一方『フロレンス』では、聖母がヒロインの祈りにより彼女の純潔を守る。聖母奇蹟譚型で聖母が関与することは勿論である。『フロレンス』はゲスタ型と聖母奇蹟譚型の中間に位置するといえる。本作品を収める唯一写本は聖母崇敬の物語や説教を多く収めている。昨今、写本全体を一つの統一体として読むことが重視されている。『フロレンス』も写本中の聖母崇敬作品の一つとして扱うべきだろう。一方、教会全体を一つの物語の如く読み解く手法も知られている。そう考えれば、本作品や壁画やポスのヒロイン達は、聖母のマントに庇護された彼女の娘達に譬えられよう。

第4章 マリアの子供達：ゴウサー『ゴウサー卿』における（反）キリストのイメージ

一応短詩に分類されるが、標題作は中世において人気を博した悪魔のロバート伝説の一つであり、後に改心する悪魔の子の生涯を描く。Ogle は作品冒頭に経外典福音書の影響を認めた。不妊の貴婦人が子を願い、夫に似た悪魔の子を孕む。これが同じく不妊のアンナが神に祈り、子を授かるという経外典の場面に似ているという説である。夫ヨアキムとアンナはマリアの親となり、『ゴウサー卿』の妻は悪魔の子ゴウサーを産む。この説は認知されているとは言えないが、当時、聖家族を扱った物語や視覚芸術が流行した事実を踏まえると、経外典の本作品への影響は無視できない。そこで『ゴウサー』と伝説・中英語版の各種ロバート伝説、経外典を比較した。『ゴウサー』では妻は本物の悪魔の子を産むが、ロバート伝説では「産んだ子は悪魔に捧げる」という妻の約束のもと、子が授けられる。妻の罪について言えばロバート伝説の方が重いが、生まれた子についてはゴウサーの方がロバートより反キリスト的である。『ゴウサー』にもロバート伝説にも、ヨアキム夫妻のエピソード、受胎告知、授乳する聖母等のパロディーという形で、経外典の影響が見られる。『ゴウサー』では母親が授乳中に赤子に乳首を嘔み切られる。これは当時よく見られた主題である聖母の授乳を想起させ、ゴウサーの反キリスト性は明白になる。一方、ゴウサーとイエスには、ともに実の父の意思を実践しているという共通点がある。そのゴウサーも、やがて憎むべきイエスに倣い聖人的生涯を終える。

第5章 アッシュモール61写本版『オルフェオ卿』－尾韻ロマンス的二行連句ロマンス？

二行連句ロマンス『オルフェオ卿』は三写本で伝わる。うちアッシュモール写本はレスタチャーの写字生レイトの手になるものである。彼の特徴として、信心深さ、家族の絆の重視等が挙げられる。同写本には五つのロマンスが収められている。『オルフェオ』を除いて全て尾韻ロマンスである。うち尾韻作品三つと『オルフェオ』には、流離、再会、復権等の尾韻ロマンスにお馴染みの主題が盛り込まれている。レイトはそのような尾韻ロマンスの作風を好んでいたと思われる。レスタチャーなど東中部地方は尾韻ロマンスを多く生んだ地である。『オルフェオ』は南部の作

品であるが、レイトの琴線に触れるものがあり、これを彼の写本に採用したのではなかろうか。しかもレイトは『オルフェオ』をさらに自分好みにする余地を見出したと思われる。そこで原作に近いアフレック写本版『オルフェオ』とアッシュモール版とを比較してみると、様々な尾韻ロマンスの特徴が後者から浮かび上がった。大陸志向、合戦好み、信義の重視、宗教色、因果応報等である。

第6章 あらいたはしや姫君様—尾韻ロマンスと日本の説経に見られる共通性

説経は江戸初期に流行した貴種流離譚の語り物で、ここでは主要な説経作品と ECFG 伝説を比較した。まず、両者には定型句や、冒頭、末尾での祈願文が頻出する。さらに説経には地名等を羅列する文体が存在する。この点ロマンスはより簡潔である。それでも『エマレ』の冒頭で、外衣について詳細に叙述するくだりがある。説経、尾韻ロマンスに頻出する主題として、申し子、近親相姦、因果応報、気丈な女性等がある。説経の流離の主人公達は一種の境界的状况に身を置くことが多いが、これも「浜辺に立つ英雄」主題に似ている。しかし説経とロマンスの共通点のみを挙げるのは危険である。説経は作者も聴衆も下層民が多かったが、尾韻ロマンスは中流層にも愛好されたことが判っている。

結論

本論文では様々な視点から教化的中英語尾韻ロマンスを論じてきた。1、2、6章は尾韻ロマンスのうち ECFG 伝説とブルターニュ短詩を集的に取り上げたものである。これにより、これらが比較的均質な作品群であることが明らかになった。3、4、5章は個別のロマンスを取り上げたが、そこでは類話、写本、視覚芸術、社会・文化的コンテキスト等も考慮した。要約すると、尾韻ロマンスはそれ自体ある程度の均質性を保ちながら、周囲の（コン）テキストと呼応しあい、一種の間テキスト性を築いていると言えよう。

論文審査の結果の要旨

本論文は、13～15世紀の英国東中部地方に隆盛した尾韻形式のロマンスのうち、教化的な内容をもつ9編の作品を、同時代の二行連句形式のロマンス、様々な類話、関連する視覚芸術、口承定型理論による主題、さらに文化的・社会的コンテキストなどをも考慮に入れながら、多様な視点から論じたものである。

主な焦点を当てる9編のロマンスは、いわゆる「ユースタス・コンスタンス・フロレンス・グリゼルダ伝説」に属する5作品と、「ブルターニュ短詩」の中に数えられる4編である。従来から、「尾韻ロマンス」、「ユースタス・コンスタンス・フロレンス・グリゼルダ伝説」、「ブルターニュ短詩」は、この分野の研究の重要なキーワードであったが、それらに該当する作品を、尾韻形式と教化的内容の二面を中心にして、上記のごとく多角的に論じた研究は、本論文の他に例を見ない。

中英語で書かれたブルターニュ短詩の分析にも獨創性が認められる。本論文は、それらが詩型の違いからだけでなく内容的にも、マリ・ド・フランス作『ランヴァル』の翻案『ランデヴァル卿』を始めとする初期のもの、本研究が取り上げる後期のもの4編に二分できることを確認し、後者については、尾韻ロマンス一般に見られる特質、すなわち、因果応報性等の要素が認められることを指摘する。

本論文は、さらに、尾韻ロマンスの中で重要な役割を果たす女性像、およびその背景を成す当時のマリア崇敬熱、視覚芸術化された「受難の皇后」伝説、キリストのイメージとそれに纏わる諸伝説、経外典福音書の影響、さらには、写本内および写本間^{インター}の間テキスト性などについて詳論している。

本論文は、このような多角的な議論を通して、主要な焦点を当てた9編の尾韻ロマンスの特質を明らかにし、それらが比較的均質な性格をもつ一つの作品群を形成していることを実証している。なお、最終章では、日本の民衆的語り物文学に言及しており、本論文の視野の広さと積極的な研究姿勢を示すものとして評価できる。

以上のとおり、本論文は多くの点で優れた獨創性を認め得る研究であり、博士（言語文化学）論文として十分に価値あるものと判断する。